

大阪「まち」がほんまにおもしろい

大阪あそび歩

ASOBO

レトロモダンのまち・帝塚山を往く ～古墳と洋館めぐりとスイーツと～

1. 帝塚山古墳
4世紀末から5世紀初頭にかけての古墳群です。土曜日に開催される「レトロモダン」のイベントで、古墳の歴史や文化について学びながら、古墳の周辺を散策することができます。

2. 遠藤家住宅(大塚市歴史文化財)
大塚市にある遠藤家住宅は、大塚市歴史文化財として指定されています。この建物は、大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。

3. 高谷家住宅(大塚市歴史文化財)
高谷家住宅は、大塚市歴史文化財として指定されています。この建物は、大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。

4. 橋本
橋本は、大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。

CLASSIC 1010
大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。

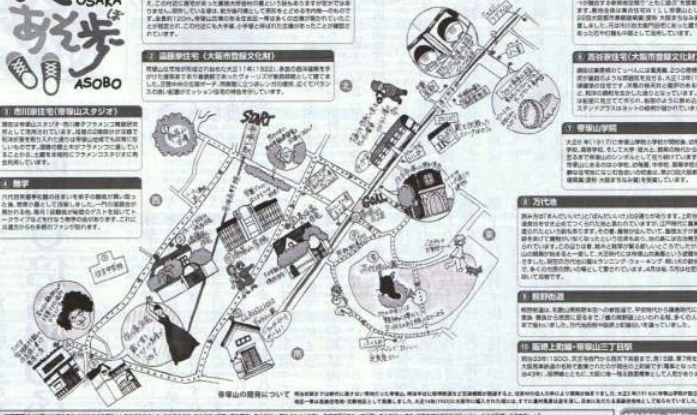
高谷家住宅(大塚市歴史文化財)
高谷家住宅は、大塚市歴史文化財として指定されています。この建物は、大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。

帝塚山方面
帝塚山方面は、大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。

万代寺
万代寺は、大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。

新野町
新野町は、大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。

高谷家住宅(大塚市歴史文化財)
高谷家住宅は、大塚市歴史文化財として指定されています。この建物は、大塚市の歴史や文化について学ぶことができます。



(提供: 大阪あそび歩)

時代の鶴瓶さんが師匠の所からよく回覧板を持ってやってきたそうです。この辺りは帝塚山といながら長屋まの趣を感じさせ、エニアで、無学も昭和を代表する職家の住居の割にはじんわりとした庶民的な建物です。

また、帝塚山の邸宅はほとんどが土蔵を誇っていました。近年、その多くが姿を消しつつありますが、一部にはフランコ教室として利用している帝塚山スタジオ(市川家住宅)や、ギャラリートとして活用しているギャラリートのような事例もあります。

ギャラリートCLASSICのオーナーの巽さんは根づからのアートの人。アートへの思いと蔵の保存活動について止めどなく話が進みます。巽さんに限らず住居・帝塚山の人話好きです。放っておくといくらでも話しようのない話ばかりです。何もう話すと、郷土史の話をお聞きしても「何もう話すと、郷土史の話をお聞きしても「何もう話すと、郷土史の話をお聞きしても」

他、のまちでも同様ですが、私はそのうちで、含蓋を孕みつつも長い歴史に支えられた地元への秘かな誇りを感じます。それはどこにも、このまちで日常的に見られる、祠や社寺の前で祈りを捧げるまの人の姿にも重なり合っています。

さて、ツアーのサブタイトルに

「古墳と洋館めぐりとスイーツ」とあるように、参加者のもつぱらの関心は、スイーツの名店に向いていました。ツアーの最後はオプショナルとして南港通り沿いのお店めぐりです。芸能人愛用の洋菓子店ポル、チーズケーキのフォルム、程菓子の老舗「福壽堂秀信」などもあり、そして最近開店したばかりですが、濃厚な味のローケルケーキが評判のコモド。

帝塚山スイーツという言葉が独り歩きし、おしゃれな店が立ち並び、大勢の人でいつもにぎわっているまちのようなイメージが形作られています。が、実情は、電通沿いに小さな店舗が数店、営業しているのが散見されるぐらいです。

かつてこの地にあった学校が相次いで郊外へ移転してしまい、学生の姿が消えたことが、まの活気を失わせたというところのようです。

こうした危機への対応が毎年5月に開催される帝塚山音楽祭で、20年以上続いています。にぎわい作りは地域の課題です。

スイーツの名店以外にも帝塚山にはぜひおススメしたい隠れた名店が数多くあります。地元消費を促すために少しでも、また、自分を紹介したいと思えます。また、自分の足で発掘するのまち歩きを楽しむだと思えます。みなさん、ぜひ一度帝塚山にお立ち寄りください。

大阪あそび歩

ASOBO



山田 重昭 (LLP YUI 企画代表組合員)

コースガイドが語るまち歩きの魅力

レトロモダンのまち・帝塚山を往く

古墳と洋館めぐりとスイーツと

帝塚山といえどどんなイメージを抱かれるでしょうか？

多分、豪邸が立ち並ぶハイソつおしゃれなまちといった感じではないかと思えます。

では、帝塚山が大阪の何処に位置するか言えますか？まさか奈良の帝塚山と混同されてはいないでしょうか？

いわゆる帝塚山の開発地区は、住吉区と阿倍野区にまたがってあります。

固定イメージが強すぎて等身大の姿が伝わらないこととありますが、私は帝塚山もそんなエリアではないかと思っています。

さて、天王寺より阪堺電車に乗って帝塚山方面に向かってみると、豪邸の立ち並ぶお屋敷街のイメージがたちまち覆されます。ハイソどころかわしるレトロなチン電(阪堺電車)

が似合う、下町情緒さえ感じられるまち並みが展開します。

「ツツカケ履きで出かけるまち」とは、代表的な帝塚山人であった故・大塚政子さんの娘の歴史子さんの言葉です。邸宅街と庶民性を併せ持つ、そんな不思議な空間が帝塚山です。

ところで近年、帝塚山を象徴してきた豪邸が急速な勢いで取り壊され、マンションや駐車場に姿を変えています。そこにはお屋敷街がそのままは維持できない現代社会の様々な事情が絡んでいるのですが、ちょっと残念なことでは。

帝塚山の開発は明治中期より住吉村の住人の手で行われました。

一大阪あそび歩」のツアーで初めて現地を訪れて、住吉と帝塚山が隣接する地区であることに気づかれた方がいらしたかもしれません。帝塚山は元々住吉村の一部で、現在も同じ町会に属しています。

歴史の古さを感じさせる住吉と近代の匂いがする帝塚山。両者が同一の地区であるなんて、意外に思われる方も多いのではないのでしょうか。

ともあれ、帝塚山の開発とその後のイメージ形成のおかげで、住吉村は府下で一、二を争う裕福な村となり、大阪市編入の際には有利な立場で臨んだそうです。

さて、「大阪あそび歩09春」における帝塚山のまち歩きでは、開発の歴史を軸に、現代に残る近代住宅建築と帝塚山古墳や万代池といった名所・旧跡を見て回ります。

帝塚山の代表的な住宅建築として、文化庁指定の登録文化財である遠藤家と高谷家があります。

高谷家住宅は銅版葺きの大屋根が特徴的で、屋根のつべんには風見鶏がついています。

遠藤家住宅は、建築家、宣教師、或いはメンソレタムの経営者として有名なウイリアム・メレル・ウォーリスの設計によって建てられました。赤レンガの煙突が特徴的で、内部もウォーリスらしい建築様式を施されているようですが非公開です。

さて、このような説明を屋敷の前でしていると、家の中から主である遠藤夫人が出てこられて「せつかくて

すからどうぞ」と招き入れてくださいました。

これは嬉しいハプニングでした。ガイドも含めツアー一行大喜びです。まさか一見したけのグループを気軽に住居に入れてくれるなんて、まさに「ツツカケ履きのお屋敷街」の面目躍如です。

玄関にはステンダグラスの飾り窓があり、入ったところの居間はグランドピアノが2台、隣の部屋にも1台、2階には古いチェンバロが1台あります。

主の遠藤一枝さんは音楽家で、今もこの家で生徒さんたちにピアノを教えているそうです。建物にももちろん建てた当時のままで、木のぬくもりのするすばらしいものでした。

帝塚山には六代目笑福亭松鶴師匠の旧宅もあります。現在、弟子の鶴瓶さんが中心となって、無学という寄席として維持運営されています。旧宅前に居住する私の義兄によると、見習い



寄席「無学」(六代目松鶴旧宅)にて